

「医療分野における研究開発に関する専門委員会」ヒアリング用レジメ

国立がん研究センター 理事長

堀田知光

「今後のがん研究のあり方」

＜現状と課題＞

がんは 1981 年以降、日本人の死亡原因の第一位を続けており、毎年 74 万人ががんに罹患し、35 万人ががんで死亡している。近年、がん医療の進歩により年齢調整死亡率は減少傾向にあるが、人口の高齢化とともにがんの罹患患者数、死亡者数は今後さらに増加が予想され、2030 年前後にピークを迎える。一方、がんは働き盛り世代の死因の約 40%を占め、本人や家族を含めた労働損失は年間 1.8 兆円になると推計されている。がんは小児における病死原因の第一位であり、特に AYA(adolescent and young adult) 世代のがんの治療成績は不良である。がん体験者数は急速に増大しつつあり、今後も増え続けることが予測されることから、就労支援を含めたサバイバーシップの充実や病院依存のがん医療の供給体制のあり方の根本的な見直し（在宅医療を実現する地域医療供給体制の変革と拡充）などが問われている。また、がん登録に基づくビッグデータをがん対策とその評価に生かすことが求められている。

＜とるべき対策＞

- 1) 疾患研究としてのがんの本態解明はがん克服の根幹であり、がん生物学としての基礎研究と出口を見据えた応用研究は両輪として融合しつつ推進されることが必須である。
- 2) がん患者数減少のために大規模疫学研究ならびに化学予防（発がんのリスクの高い方に薬物等を投与することでがんの発症を抑制する）に関する臨床試験を含む先制医療としての予防介入研究を推進する。
- 3) がんの本態に基づく革新的な診断法、根治的かつ低侵襲の治療法（薬物療法、手術療法、放射線治療およびそれらの集学的治療）の医薬品並びに医療機器の開発研究を促進し、個別化医療を実現する。特に希少がん、難治性がんに対する治療開発を促進する。
- 4) 腫瘍免疫学、バイオインフォーマティクス、生物統計学、生命倫理学、医療経済学、ヒトでの薬物動態・薬力学等の最近の我が国がん研究では重視されてこなかった分野の研究人材を養成をすると共に研究を推進する。
- 5) 小児、高齢者などライフステージとがんの特性に適した最適な治療体系

や療養体系を確立する。

- 6) がんサバイバーシップ研究（がん体験者の充実した生活を実現するための研究）を推進する。
- 7) がん医療を均てん化させるために、我が国のがん医療の実態を常時把握して研究するがん政策科学の充実を図る。具体的には精度管理されたがん登録データに加え、予防・検診研究データ、がん診療連携拠点病院等における医療情報、さらには DPC データも取り込み、がん医療に関するビッグデータとして有効活用する。こうした解析研究は、がん診療の拠点であると共に、がん対策情報の集約拠点でもある国立がん研究センターが担う。

上記を踏まえて、がん研究・がん対策を長期にわたり一貫して推進するために、ナショナルセンターとしての国立がん研究センターは、新たな研究体制においても、求心力をもち研究をリードする役割を果たしていく。

以上